

2022.1.16

# 日本語タミル語起源説について

清水徹朗

1. 日本語の特色と日本語系統論
2. 「日本語の起源」研究史
3. 大野晋の生涯と言語研究
4. 『日本語の起源』(旧版)(1957)
5. 「日本語タミル語起源説」に至った経緯
6. 『弥生文明と南インド』(2004)
7. 大野説への批判とその後の展開

# 1. 日本語の特色と日本語系統論

## [日本語の特色]

- ・音韻……母音は5音(あいうえお)で少ない。子音の数も少ない。
- ・語順……SOV(主語+目的語+動詞)……「私は米を食べる」  
形容詞+名詞(赤い米)、名詞+助詞(日本へ、稲の)
- ・**膠着語**……助詞等をつけて文法関係を示す(「が」「を」)← 孤立語、屈折語
- ・動詞の変化……5段活用(取らない、取ります、取るとき、取れば、取れ)
- ・時制……過去は「た」を付けて示す、未来形がない
- ・冠詞(the, a, la, der)や関係代名詞(that, who, which)がない

分類	定義	言語	例
膠着語	助詞等の付属語をつけて文法関係を示す	日本語、朝鮮語、シュメール語、タミル語、トルコ語	が、を、に れる、らしい
屈折語	動詞や名詞の語形変化によって意味を示す	ラソ語、ギリシャ語、英語、ドイツ語、アラビア語	safe, safety, safely
孤立語	単語の形が変形せず語順で意味を示す	中国語、ベトナム語、フエツ語、ビルマ語	我姓清水

\* フンボルトが1836年に提唱。分類は厳密なものではない。

## [日本語はどこから来たか]

- ・日本は**中国の文明から多大の影響**を受けてきた……漢字、儒学、仏教、道教
- ・中国由来の名詞は多くあるが、**中国語は日本語と大きく異なる**(文法、発音)
- ・日本語と**朝鮮語**は、文法は共通であるが**基本単語が異なっている**
- ・**アイヌ語**は**日本語と大きく異なる**(文法、発音、単語)。
- ・**琉球語**は**日本語と同系統の言語**であるが、「方言」とは言えない。  
→ 日本語はどこから来たのか、どう形成されたのか

**<日本人が独自に生み出したものではない>**

## [日本語系統論]

- ① 朝鮮語と同系……白鳥庫吉、金沢庄三郎
- ② ウラル・アルタイ語族……藤岡勝二、泉井久之助、村山七郎
- ③ 南方アジア言語……松本信広、西田龍雄、安田徳太郎(レプチャ語)

## [世界の言語系統]

- ・インド・ヨーロッパ語族……ヒンズー語、ギリシャ語、ラテン語、英語、独語、仏語
- ・ハム・セム語族……ヘブライ語、アラビア語、エジプト語
- ・ウラル語族……ハンガリー語、フィン語
- ・アルタイ語族……モンゴル語、トルコ語、キルギス語、カザフ語
- ・シナ・チベット語族……中国語、チベット語
- ・オーストロアジア語族……ベトナム語、クメール語
- ・オーストロネシア語族……タガログ語、インドネシア語、マレー語、アミ語
- ・ドラヴィダ語族……タミル語、テルグ語、カンナダ語、マラヤーラム語



**系統が不明の言語……日本語、朝鮮語、バスク語**

# 世界の言語分布図



## 2. 「日本語の起源」研究史

- 1719 新井白石が日本語の語源・系統を考察（『東雅』、朝鮮語との関係を指摘）
- 18世紀 本居宣長（1730–1801）が日本語の音韻・上代特殊仮名遣を研究
- 1879 アストン（イギリス人外交官）が**日韓言語の音韻対応**を指摘  
→ 白鳥庫吉（1897）、金沢庄三郎（1910）が継承
- 1886 帝国大学に言語学科創設（当時は「博言学科」）  
担当教授はチェンバレン、欧州の比較言語学の教科書で講義
- 1894 上田万年が博言学科教授就任（フランス留学後）  
→ 藤岡勝二、新村出を育てる
- 1898 言語学会結成
- 1901 田口卯吉「日本語アーリア語同系説」← 藤岡、新村が反論  
（欧州での黄禍論への反論が目的）
- 1908 藤岡勝二「日本語の位置」…「ウラルアルタイ語説」を唱える  
→ **言語学会の定説**となる
- 1911 木村鷹太郎『世界的研究に基づける日本大古史』  
日本神話がギリシャ神話の起源、日本語がギリシャ語・ラテン語の起源  
← 言語学者は批判せず無視、「トンデモ」本との評価

- 1926 ラバートン（オランダ人）、ヒーマント（イギリス人）が  
日本語とオーストロネシア語との関係を指摘  
（1892年に井上哲次郎が南方説を提唱）
- 1927 坪井九馬三、堀岡文吉が南方説を展開
- 1935 新村出『国語系統論』…… 諸説を解説
- 1938 金田一京助『国語史系統論』……諸説を解説
- 1940 パーカー『日本語・チベットビルマ語同系説』
- 1955 安田徳太郎『万葉集の謎』……レプチャ語起源説  
（『日本語の祖先』1976）
- 1957 大野晋『日本語の起源（旧版）』
- 1959 服部四郎『日本語の系統』
- 1971 ミラー『日本語とアルタイ諸語』
- 1973 江上波夫・大野晋編『古代日本語の謎』  
（「東アジアの古代史を考える会」第1回シンポジウム）
- 1974 江実「日本語はどこから来たか」…パプア諸語との関係
- 1978 村山七郎『日本語系統の探究』
- 1981 大野晋『日本語とタミル語』…タミル語起源説を主張
- 1994 大野晋『日本語の起源（新版）』



### 3. 大野晋の生涯と言語研究

1919 東京（深川）で生まれる 開成中学、一高で学ぶ（直木幸次郎が同級生）

1943 東京大学国文学科卒、60年より学習院大学教授

『岩波古語辞典』（1974）の編纂（約20年間）・・・上代20万語を担当

万葉集、日本書紀の校注

1957 『日本語の起源』（旧版）

1974 『日本語をさかのぼる』

1980 『日本語の成立』（タミル語について言及）

1981 『日本語とタミル語』

1987 『日本語以前』

1993 『係り結びの研究』 ……1955年より研究

1994 『日本語の起源 新版』（75歳の時）

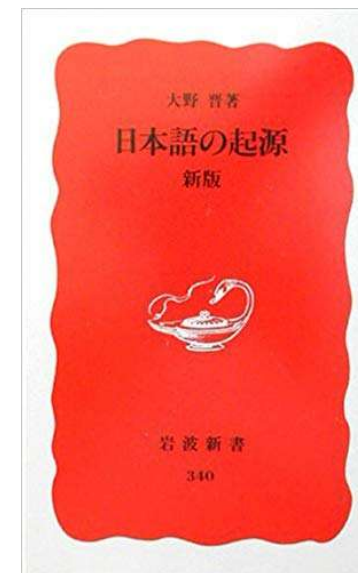
1999 『日本語練習帳』 ……ベストセラー（192万部）

2000 『日本語の形成』

2001 『日本人の神』

2004 『弥生文明と南インド』

2008 死去（89歳）



## 4. 『日本語の起源』（旧版）（1957）

### [本書の目的]

「**日本語の系統と成り立ち**」の解明

……**国語学会、国語学者の課題**

国語学の立場から日本人、日本文化の起源を考える

**「日本語の起源、成立の問題は当然日本人の起源の問題にも結びつく」**

「ただし、人種の問題と言語の問題とは必ずしも重なるものではない」

「日本の言語学は、言語学的な資料だけに頼って日本語系統の問題を考えてきた。」

→ **人類学、文化史、考古学、民族学等の学問と共同して日本語や日本人の起源と成立を考えていく必要がある**



## (1) 日本人とアイヌ人と

岩宿での石器の発見 (1949) ……無土器文化

アイヌ人は本州に住んでいた可能性が高い

シーボルト「日本には先住民としてアイヌ人が住んでいたが、それを後から渡ってきた民族が追い払って日本の国を作った。」

服部四郎 (言語学者) …「アイヌ語と日本語は同じ系統の言語かもしれない」 (1955)

東北にはアイヌ的な地名が多い……ナイ、ベツ

蝦夷 (エミシ、エゾ) ← 樺太アイヌ語エンチュ (男、人) より

アイヌ人の特徴 ①二重まぶた、②毛深い、③蒙古斑がない、④味盲率が高い

アイヌ人の血液型は日本人と異なる

→ 「アイヌの遺伝形質は日本人と大きく異なり、起源的に別の人種であると見るべき」

[日本人の地域差]

- ・東北地方の人はアイヌに近い遺伝的特徴 (血液型、指紋)
- ・中部地方と近畿地方の間に断層がある

アイヌ文化……土器、くがたち、とりで、熊祭り

アイヌは本州にもともといた民族か (縄文時代)、あとから入った民族か

アイヌは農業を持った民族に次第に圧迫された民族

## [アイヌ語と日本語は同系か]

日本語とアイヌ語は、日本語と英語、日本語と中国語ほどには相違していない。語彙の点を除くならかなり似ている。しかし、重要な点で相違がある。

### [共通点]

- ・ 母音が5つ (a, i, u, e, o)
- ・ アクセントが高低によって決まる
- ・ 名詞に性、数、格による変化がない
- ・ 語順が大体同じ

### [相違点] (日本語と異なるアイヌ語の特徴)

- ・ 清音と濁音の区別がない
- ・ 子音で終わる言葉が多くある
- ・ ラ行で始まる言葉が多い
- ・ 動詞の活用の形式がちがう
- ・ 私、あなた、彼によって異なった接頭辞が使われる (最大の相違点)
- ・ 一つの動詞が主語の単数、複数によって異なった変化をとる



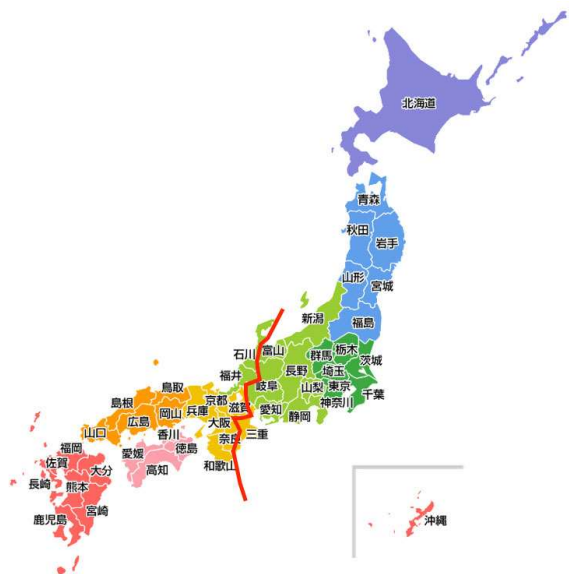
アイヌ語は抱合語……エスキモー、アメリカンデ ィアン、バスク語、コーカサス地方と同じ

金田一京助は日本語とアイヌ語は別系統の言語であると主張

- ・ 数詞は共通点と相違点がある
- ・ 人体語は類似する単語もある
- ・ 日本語から入った単語もある (カムイ、ヌサ、サケ、オニ)
- アイヌ語とウラル語、コーカサス地方の方言との比較が必要

## (2) 日本の東部と西部と

- 日本の東部はB型が多く、西部はA型が多い
- 境界線は近畿地方と中部地方の境、方言の境界線も同じ
- 社会組織の差…東は本家分家の上下主従関係、西は年齢階級により分けられる
- **東西の差異は歴史的に形成された**
  - ← 弥生時代に入ってきた稲作、機織、鉄器
  - 北九州が文化の取り入れ口 → 東へ拡大
  - 東部には縄文文化の伝統が強く残った
- **日本神話における南方的要素** (インドネシア族との共通性)



### (3) 南方に日本語の親戚はあるか

#### ① 言語の親戚関係

- ・ 文字や単語だけでは系統は決められない (漢字、借用語の例)
- ・ 発音の比較 (子音と母音の関係、単語の始まりと終わり、二重母音)
- ・ 語形変化 (単数形、複数形、現在形、過去形)
- ・ **音韻対応** (同じ法則で音韻が変化、ドイツ語と英語の関係)
- ・ **文法の比較** (語順 [主語・述語]、助詞、助動詞)

#### ② 琉球語は日本語の兄弟(同系の言語)である

- ・ 基本語が対応 (手、目、花、名、米、飲む)
- ・ 動詞の活用形式が対応 (未然形、連体形、終止形、命令形)
- ・ 代名詞が対応 (これ、あれ、なに)
- ・ アクセントが対応

#### ③ 高砂族の言語、マライ・ポリネシア語

- ・ 高砂族 (台湾) の言語はインドネシア語の系統
- ・ 日本語と高砂族の言語は全く相違 (単語、文法)
- ・ ポリネシア語の音韻は日本とよく合致
- ・ 基本的な人体語が類似 (目、口、背、乳)

#### ④ モン・クメール語

- ・モン・クメールは揚子江の南方に広がっていた民族
- ・日本語と同系とは言えない（接頭辞、接尾辞の使い方、語順）
- ・ただし、代名詞に共通の性格
- ・マライ山地民の人体語は日本語に類似（顔、体、手、腹、目、額）  
→ 日本語と何らかの関係があると見るべき

#### ⑤ チベット・ビルマ語

- ・同系説（パーカー）がある（文法、語順）
- ・人類進化の中心であった中央アジアから周辺に人間が移動  
→ チベット・ビルマ族が揚子江、朝鮮半島経由で日本へ渡った
- ・ビルマ語と日本語の文法構造はよく似ている
- ・代名詞も類似
- ・同系とはいえないが、何らかの関係があった可能性

#### ⑥ レプチャ語

- ・レプチャ語はチベット・ヒマラヤ語群の一つ
- ・安田徳太郎が指摘（『万葉集の謎』）
- ・レプチャ人はインド北方シッキム地方の最も古い住民
- ・チベット語（レプチャ語）は孤立語であり、膠着語の日本語と異なる
- ・単語が異なるが（一部似ている）、擬態語は類似
- ・安田徳太郎の研究手法は不十分（不適切）

## (4) 古代日本語とアルタイ語・朝鮮語

### ① 弥生式文化と南朝鮮

- ・ 弥生式文化（BC300年頃開始）……稲作、機織、金属器
- ・ **北九州に始まり近畿地方に発展** ← 南朝鮮から伝わる
- ・ 農業に関する単語が類似（畑、鉞、鋤、犁、串）
- ・ 工芸に関する単語も類似（機織、針、衣、笠、靴、窯、鉛）
- ・ 支石墓、甕棺、銅剣、石包丁、稲作文化、注連縄
- ・ 朝鮮で北方ツングース系文化が融合し日本に伝わる（父系氏族制度、天孫降臨）
- ・ うじ（氏）、カラ（家柄、ハラカラ）という単語が共通
- ・ 郡、村、升、太陽神、アマツカミ、神木

### ② アルタイ語の特徴と母音調和

- ・ アルタイ語＝トルコ語、蒙古語、ツングース語……遊牧民族
- ・ **日本語と共通点が多い**  
（単数・複数の区別がない、名詞の性がない、冠詞がない、語順、助詞、関係代名詞がない、疑問助詞）
- ・ **母音調和**（仲の良い母音と悪い母音…一つの単語に両方が含まれることはない）  
→ アルタイ語共通の特徴



### ③ 橋本進吉博士による発見

- ・ 古代日本の母音は8つ ← 「い」「え」「お」が二つあった（甲と乙）
- ・ 古事記では甲と乙を使い分けている
- ・ 「神代文字」が偽作（甲乙を分けていない）

### ④ 古代日本語の母音調和の発見

- ・ 古代日本語には母音調和があった
- ・ 日本語は文法構造と母音調和がアルタイ語と一致

### ⑤ 日本語とアルタイ語

- ・ 相違点も少なくない
  - ・ アルタイ語は r と l を区別
  - ・ 日本語では濁音は語頭に立たない
  - ・ アルタイ語は子音で終わることがある
  - ・ 一般の単語の対応が少ない
- **日本語とアルタイ語は早い段階で分離した**

### ⑥ 日本語と朝鮮語

- ・ **朝鮮語の構造はアルタイ語に近い**
- ・ 朝鮮語には母音調和もあった
- ・ アストンが二つの言語を比較し、百数十の対応語を指摘
- ・ 金沢庄三郎『日韓両国語同系論』（1910） → 「日朝同祖論」
- ・ しかし、動詞の対応がない
- ・ 数詞が異なる

## ⑦ 南方語と北方語

- ・日本語とアルタイ語は人体語が対応
- ・南方との共通性は縄文時代からのもの。
- ・そこに朝鮮(北方)からの言語が加わった(重なった)。
- ・日本神話には南方的要素が多い。
- ・カンボジア、安南、南シナから中シナを経た稲作の文化が南朝鮮に入り、そこに北方ツングース系の文化と融合した後、日本に伝わった。
- ・南朝鮮には南方系(マライ・ポリネシア)の人間がかつて住んでいた。
- ・縄文時代の西部日本に南方的な色彩が見られる。
- ・古代日本語とポリネシア語の音韻は類似。
- ・『魏志倭人伝』に出てくる人名、役人の名はアルタイ系

### [日本語の成立]

- ・縄文時代の日本の言語(音韻体系)は南方系(ポリネシア語族)
- ・弥生式文化の伝来とともにアルタイ語的な文法体系と母音調和を持った朝鮮南部の言語が伝わる(北九州→南、東へ)→原始日本語の成立(2300年前)
- ・この時期に琉球語も成立
- ・南朝鮮からの言葉は文法体系を変えたが、語彙の一部は残った。  
また、南朝鮮から入った言葉にも、すでに南方的要素が含まれていた。
- ・一方、東国には、西日本とは起源的に異なる民族が住んでおり、異なる文化と言語を持っていた(アイヌの形質が影響しているが、アイヌ語とは言えない)

## (5) 探索は続く

- ・ **言語年代法**……基礎語は一定の速さで代わっていく（スワデッシュが提唱）
- ・ 千年に2割（19%）の比率で変化
- ・ 現代京都方言と琉球語の分離時期は1450～1700年前（弥生～古墳時代）
- ・ **日本語とアイヌ語の分離時期は7千年～1万年前**
- ・ 古典語（万葉集、枕草子、源氏物語、徒然草）の共通語712語の現在までの残存率  
……動詞86.7%、形容詞79.5%、名詞79.1%、助詞53.0%、助動詞18.0%
- ・ 意味変化の類型
- ・ 新しい研究方法の開発が必要
- ・ 日本語の成立史は次第に明らかになってきたが、探索は続いている。
- ・ 今は黎明期

## 5. 「タミル語日本語起源説」に至った経緯

1973 芝蒸「ドラヴィダ語と日本語」

1974 藤田明…ドラヴィダ語の研究を始める

1970年代末 江実がドラヴィダ語を研究

→ 江実の勧めでドラヴィダ語の教科書とテープを購入 (28万円)

1979 『ドラヴィダ語源辞典』を買う (丸善)

→ 電車の中で読むと日本語と対応する単語が多いのに驚く

ドラヴィダ語研究を開始 (日本人として4人目、タミル語に絞る)

1980 雑誌『言語』で日本語とタミル語の対応語について発表

『日本語の成立』(タミル語について言及)

1980 マドラス大学を訪問しコタンダラマン教授(言語学)に会う

NHK、週刊朝日と南インド共同現地調査→テレビ番組、週刊誌記事に

1981 第5回世界タミル学会(タミル州マドライ)で「日本語とタミル語の関係」

を発表 …… ヴァツェク氏(チェコ・カレル大学教授)に会う

1981 『日本語とタミル語』出版

1981-82 マドラスに滞在し、サンガム(タミル古代詩)を研究



## [タミル語と日本語の共通性]

- ・音韻に共通性がある
- ・語順が同じ……そのまま日本語になる
- ・共通の単語が多くある……農耕、機織、祭祀
- ・膠着語
- ・助詞の使い方が同じで似ている助詞が多くある
  - ……も(um)、か(kol)、は(vay)、の(in)、や(ya)
- ・サンガムと日本の和歌が同じ「五七五七七」の形式

## [稲作・農耕に関する共通の単語]

- ・畔(あぜ)、畝(うね)、田んぼ、泥(しろ)、米(こめ、くま)、稲(いね、しね、に)
- ・糠(ぬか)、餅(もち)、粕(かす)、粢(しとぎ)、畑、粟

## [ポンガルと小正月の共通性]……同じ1月15日

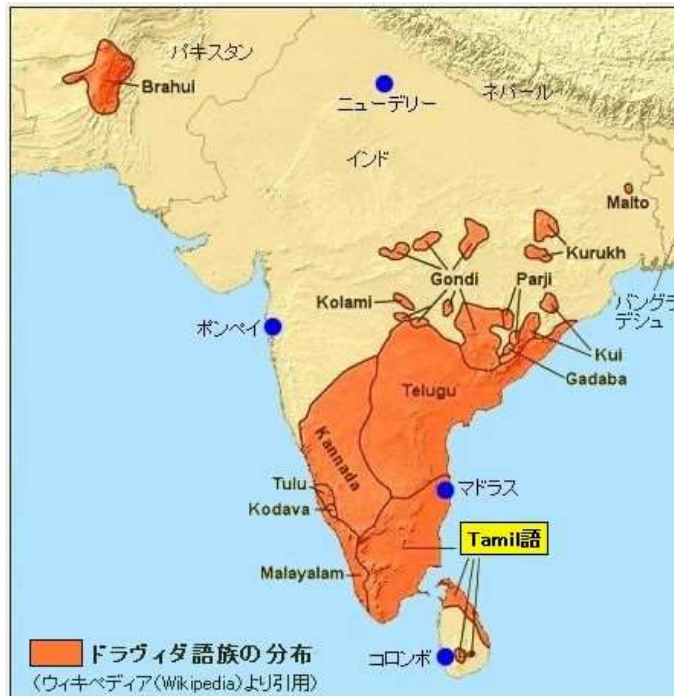
- ①トンド焼き、 ②注連縄を張る、 ③門松を立てる ④お粥を食べる
- ⑤カラス勧請、 ⑥神に供え物をする(鏡餅) ⑦三河万歳 ⑧墓参り

## [墓制、祭祀]

- ・巨石文化、支石墓、甕棺が共通
- ・神(かみ)、祭る、祓う(はらう)、崇む(あがむ)、忌み、墓(はか)という単語  
大野晋『日本人の神』(1997)

## [タミル語とは]

- ・インド南部のタミルナード州(首都チェンナイ)で話されている言語(約5000万人)
- ・スリランカにもタミル語を話す人がいる(マレーシア、シンガポールにもタミル人がいる)。
- ・ドラヴィダ語族……タミル語、テルグ語、カンナダ語、マラヤーラム語
- ・ヒンディー語とは系統が全く異なる(使っている文字は共通)
- ・「ムトゥ 踊るマハラジャ」(1995)はタミル語の映画



நன்றி  
धन्यवाद  
ขอบคุณ

タミル語  
「ナンドゥリ」  
ヒンディー語  
「ダンニャバード」  
タイ語  
「コップン」



## 6. 『弥生文明と南インド』 (2004)

### [序説]

南インドの文明が3000年前に日本に到来し、弥生時代という新しい文明の時代を開く原動力となった。それに伴って古代タミル語が日本語にかぶさり、単語と文法が受け入れられて一つのクレオール語（進出してきた勢力の言語がそれまでの言語に影響を与え新しい言語が形成される）が誕生した。

### [古代タミルと古代日本の共通点]

弥生時代…三つの文明的変革 ①水田稲作、②金属の使用、③機織

タミル語と日本語の対応語 ①穀物生産に関する単語、②金属に関する単語、③機織に関する単語、④神、祭祀、禁忌、罪過に関する単語

タミル語の古典サンガム（詩）…2400首、BC200～AD200

弥生時代の文明と言語は、南インドから伝来した文明と言語が縄文時代のそれらの上にかぶさり、それを変容させた結果である。



## [1] 新年の豊作祈願の民族行事

- ・ **日本の小正月の行事と南インドのpongalの行事に共通点が多い**
- ・ Pongal（ポンガル）……ヒンズー教以前の古い祭。1月15日に行われる
- ・ 現地でpongalの祭を見学（1982年、Kothandaraman氏 [マドラス大学教授] の故郷）  
→ 多くの共通点に驚く

### ① “pongal”と“ホンガホンガ”

- ・ pongalはタミルナード州で1月10日頃から行う祭り
- ・ pongaとは「**熱で沸き立つ**」という意味
- ・ 1月15日の夜、“pongal, pomgal”と叫びながら家の周りを廻る
- ・ 柳田国男が秋田県の北部や青森県で小正月（1月15日夜）に「ホンガホンガ」と唱えて家の周りを歩くことを紹介（『歳時習俗語彙』1939）。
- ・ 菅江真澄（江戸時代の民俗探訪家）も、秋田を訪問した際の日記で同じことを書いている（1803年）

### ② 古い物を集めて焼く(どんど焼き)

- ・ 南インドでは1月14日に使い古した物を焼く（翌1月15日が新年）
- ・ 日本でも1月15日に正月に使った物や古い物を集めて焼く（どんど焼き）
- ・ タミル語の“tonru”は「古い物」という意味。

③ 小屋を焼く

- ・南インドでは古い牛小屋を焼き作り直す
- ・日本でも正月小屋を作って焼く

④ 注連縄(しめなわ)を張る

- ・南インドでは縄にインドセンダンやバナナの葉をつるして村や家の入口に張る

⑤ 門松を立てる

- ・南インドではバナナの木やココナッツの木を門に立てる

⑥ 若水を汲む



⑦ お粥を炊く

- ・南インドでは、**お粥を炊くのは新年の行事の中心**。  
甘いお粥（昔は赤米）を炊いて食べる。
- ・日本では、1月15日に小豆粥を炊く（平安時代の記録にある）

⑧ お粥をカラスに供える(カラス勧請)

- ・南インドでは、炊いたお粥を屋根の上に持って行きカラスに与える（“ko,ko”と呼ぶ）  
← カラスが食料をもたらしてくれたという南インドの伝承がある
- ・日本では、小正月に餅をカラスに投げ与える行事がある（青森県）

⑨ 神に供え物をする

- ・南インド…米粉で作った菓子    ・日本……鏡餅

⑩ 三河万歳が廻る

- ・南インド……1月15日に鐘、小鼓を打ち鳴らして詞を述べる人が家々を廻る
- ・日本……正月に三河万歳が小鼓を打ちながら家々を廻り寿詞を述べる

⑪ 米をもらって廻る

⑫ 成り木責め……果樹に向かって叫ぶ「成るか成らぬか」

⑬ 墓参り、寺参りをする

⑭ お仕着を配る……1月15日に主人が奉公人に衣類を配る

⑮ 踊りをする……正月に女性たちが輪になって踊る

⑯ 牛馬への祭

## [赤米と祭]

- ・日本では赤米を栽培して神社に奉納しているところがある  
(岡山県総社市、長崎県対馬、鹿児島県大隅地方、種子島)

「私の一番の疑問が、中国で一向お祭に使っていないものを、**なぜ日本でお祭用にしておるか**ということです。」(安藤広太郎)、「**赤米がもとの古い姿**であったのでそれを引き継いで神様に供えたとみれないだろうか。」(盛永俊太郎)

「赤米はことに山地で栽培される。中国人のところでは赤米は劣等米とされているが、この方が栄養に富んでいる。ヤオ族は赤米をすべての点において白米よりも良いと考えている。」(大林太良)

## [赤米と赤飯の関係] (柳田国男)

「以前の米(赤米)は、まだ食べてみないからわかりませんが、必ずしもまずくなかったかもしれない。……ことによると、**信仰行事に使う米だけは赤を選ぶ**ということはあったのかとも思います。」

「私の仮定では、あれは豆が入用なのではない。**赤い色が入用だった**。現在でも、小豆を食べる日をずっと当たってみると、必ずしも祭の日とはいえないけれども、日本では物忌みをして、潔斎に入る日と、ふだんの生活にもどる日の境目を、この赤い食物によって意識させようとしていました。……その時点の重要さを自ら印象づけるために、**小豆又は赤飯の赤色が使われた**とみるよりほかはないのであります。」

## [南インドにおける赤米のお粥]

「**お粥は赤米で作るんです**。……実は私がタミルの問題にこんなに首を突っ込んだ大きな原因はこのお粥にあったんです。」(大野晋、1989)

「小正月の日に小豆粥を食べるといのは、**中国の揚子江の流域の稲作文化**の中で発達した行事ではないかと考えるわけです。」(大林太良)

「ひょっとすると、このお粥は、稲作よりも古い儀礼に関係する可能性があるかもしれません。……インドネシアのいちばん東の端の島では、アワとハトムギのお粥みたいのようなものを作って通過儀礼に食べているのです。」(佐々木高明)



## [2] 南インドと日本の海上交通 —ガラスのビーズ—

### [弥生時代の船]

- ・弥生時代中期の土器に36人漕ぎの船の絵がある（奈良県清水風遺跡）

### <岩田明の検証>（1992年）

- ・シュメールの粘土板に書かれた船の材料で帆船を建造（南インド・ケララ州）  
（全長15メートル、30トン、2枚の帆）
- ・7人のタミル人を雇ってスリランカからシンガポール、台湾経由で日本まで渡航  
→沖縄久米島で横転したが、沖縄まで来ることができた
- ・マレーシア、シンガポールにはタミル人が多数住んでいる
- ・ベトナム難民が日本に漂着  
→南インドから日本まで帆船によって来航が可能（船団を組んだ可能性）

### [ガラスのビーズ]

- ・日本でインドパシフィックビーズが発掘（北九州、BC3～2世紀）
- ・インドパシフィックビーズは南インドから東南アジア各地に流通  
→日本列島、朝鮮半島まで及ぶ
- ・インドパシフィックビーズは赤褐色のガラスのビーズ

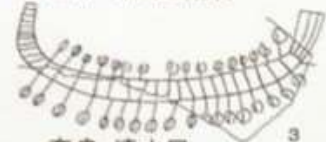
# 弥生時代の船



奈良・唐古



福井・井向(銅鐸)



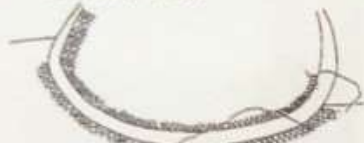
奈良・清水風



奈良・坪井大福



愛媛・樽味高木



岡山・城



長崎・原ノ辻



奈良・唐古



愛媛・樽味高木



広島・御領

# 古墳時代の船

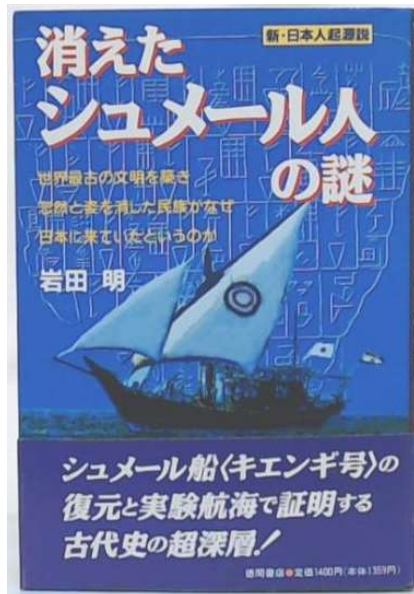


奈良・東殿塚古墳(埴輪)



(文化庁) 保管、大阪歴史博物館展示







### [3] 弥生時代の開始年代－鉄の観点から－

- ・ 弥生時代の開始はBC10世紀（新説）←かつてはBC 5～4世紀とされていた
- ・ 中国で鉄の製造が始まったのは西周代（BC1100～770）後期→普及はBC500年代
- ・ インドではBC1100年に鉄が製造されていた ←「リグヴェーダ」の記述
- ・ 日本で弥生時代初期（BC10世紀）に鉄を使っていたとすると中国より早いことになる
- ・ 弥生時代初期に南インドから鉄が輸入されたとすると矛盾なく説明できる
- ・ タミル語「kan（銅）」、日本語「kane」

### [4] 文字以前の記号（グラフィティ、Graffiti marks）

- ・ 甕棺や土器に刻まれた記号が南インドと日本で共通
- ・ Graffiti（英語）の意味は「落書き」
- ・ 単なる落書きではなく何らかの意味を有する  
……製造者、氏族、動物、植物、武器、雨、蛇、米
- ・ 中国（山東半島）や朝鮮でもグラフィティが発見された
- ・ インダス文明のハラッパー、モヘンジョダロからも出土
- ・ **南インドの巨石時代の文明はインダス文明を受け継いでいる**
- ・ **インダス文明の担い手がドラヴィダ語を話していた可能性が高い**
- ・ その後、南インドではブラフミー文字が広まったが、その頃には南インドと日本の関係が途切れてしまったため、ブラフミー文字は日本に伝わらなかった  
（→東南アジア全体には広がる）

## [5] 墓制

### <支石墓>……石で支える墓

- ・南インドに支石墓がある。
- ・日本では西北九州の限られた地域で見られる
- ・中国、朝鮮にも支石墓がある
- ・ただし、南インドにあるドルメン式（石の全てが地上部）は日本にはない



### <甕棺>

- ・南インドと日本の甕棺は形が類似している
- ・**インドの甕棺はインダス文明まで溯れる**
- ・朝鮮南部でも甕棺が出土
- ・縄文時代は成人の遺骸を甕棺に納めない（小児にはみられた）
- ・他に箱式石棺、立石、積石塚、陶棺、周溝墓、木棺、土壙墓について南インドと日本を比較
- ・副葬品の共通性（子持壺、五面鼓）、馬齡、馬鐸、円形器台



## [6] 穀物の生産

- ・南インドでは巨石時代（BC1000～AD300）に稲作が行われていた
- ・インダス文明ではBC3000年紀中葉の遺跡から稲粒の圧痕が見つまっている

### [共通の単語]

- <畔> 日 (aze)、タミル (accu)、<畝> 日 (une)、タミル (anai)
- <田> 日 (tambo)、タミル (tanpai)
- <畑> 日 (fata→fatake)、タミル (patukar)
- <焼畑> 日 (koba)、タミル (kmari)
- <粟> 日 (afa)、タミル (avai)、<米> 日 (kome)、タミル (kmai)
- <糠> 日 (nuka)、タミル (nukku)、<粥> 日 (kayu)、タミル (kali)
- <餅> 日 (motifi)、タミル (mokakam)
- <粕> 日 (kasu)、タミル (kati)
- <稲> 日 (sine, sinai, ine)、タミル (tinai, enal)

## [7] 機織

- ・インダス文明（BC2500～1500）では綿布が使われていた。
- ・南インドの巨石時代に紡績車を使用
- ・日本でも弥生時代の遺跡から機織の部品、平織の圧痕を出土
  - <織る> 日 (oru)、タミル (allu)
  - <機・旗> 日 (fata)、タミル (patamu)
  - <カセ> 日 (kase)、タミル (katir) …機織の部品
  - <マネキ> 日 (maneki)、タミル (manai) …機織の部品

## [8] 祭祀・禁忌・罪過 ー神をめぐるー

- ・ 縄文時代……土偶、石刀、墓
- ・ 神道……① 古代からの伝統を受け継いだ「カミの祭祀」  
② 鎌倉時代以降の神道教義（伊勢神道等）

### [日本の「カミ」]

- (1) 八百万の神、アニミズム
- (2) 超人的な威力……カミナリ、オオカミ
- (3) 支配者、領有者……山、川、海、天皇

### [南インドの「カミ」]

- (1) 数多くの姿の見えない神……「八百万の神」と同じ
- (2) 恐れの対象、超人的な存在 → 日本と南インドの共通性
  - ・ 崇め拝み合唱礼拝する対象
  - ・ 香草や歌舞によって満足させる

<神> 日 (kamu, kami)、タミル (koman)

<巖> 日 (itu)、タミル (iti)、<祭る> 日 (maturu)、タミル (matai)

<祓う> 日 (farafu)、タミル (paraun)

<乞う> 日 (kofu)、タミル (kuppu)、<忌み> 日 (imi)、タミル (im, imam)

<化かす> 日 (bakasu→bake)、タミル (pakattu)

<罪> 日 (tumi)、タミル (timai)、<とが> 日 (toga)、タミル (tukal)

<悪> 日 (waru)、タミル (varu)

## [9] タミル語と朝鮮語

朝鮮語はアルタイ語（トルコ語、モンゴル語、ツングース語）と構造的に共通点が多いが、日本語、ドラヴィダ語とも類似点が多い

- (1) 膠着語…前置詞を置かず、単語の後に助詞、助動詞を付ける
- (2) 修飾語は被修飾語の前に付く
- (3) 目的語は動詞の前に来る
- (4) 主語は前に置かれ述語とその接辞は文末に来る
- (5) 関係代名詞がない
- (6) rで始まる単語はない

しかし、トルコ語、モンゴル語、ツングース語と単語の対応関係が乏しい  
タミル語、朝鮮語、日本語に共通する対応語が存在（基礎語が多い）

- <所、場所> 日 (ka)、朝鮮 (kwi)、タミル (kap)
- <串> 日 (kusi)、朝鮮 (kos)、タミル (kucci)
- <国、地> 日 (na)、朝鮮 (na)、タミル (nalam)
- <我> 日 (na)、朝鮮 (na)、タミル (nan)
- <畑> 日 (fata)、朝鮮 (pat)、タミル (patuka)
- <群> 日 (mura)、朝鮮 (mul)、タミル (mur)
- <原> 日 (fara)、朝鮮 (para)、タミル (pal)
- <張る> 日 (faru)、朝鮮 (pulu)、タミル (paru)
- <海> 日 (wata)、朝鮮 (patah)、タミル (patam)
- <祭る> 日 (maturu)、朝鮮 (masi)、タミル (matu)
- <町> 日 (mati)、朝鮮 (mazal)、タミル (matil)
- <終わる> 日 (musubu)、朝鮮 (mats)、タミル (muti)
- <母> 日 (amma)、朝鮮 (amh)、タミル (amma)

## 7. 大野説への批判とその後の展開

- ・日本語タミル語起源説は**多くの批判**を受けてきた。
- ・最大の批判者はアルタイ語起源説を唱えていた**村山七郎**（1908－95）
- ・大野と村山の間で激しい論争が行われた。
- ・ドラヴィダ学の第一人者であった**辛島昇**（当時東大教授）も**批判的**
- ・考古学者、農学者、民族学者からも支持を得られなかった。
- ・大野は「私の研究に対して**日本でまだだれ一人、公式に賛成を表明した人はいない**」（1989）と書いている。

「（大野晋が指摘した）約420のタミル・日本語比較例のうち、史的日本語研究およびドラヴィダ比較言語学の立場からの**検討に耐えうる、説得力あるものを一つでも見出すことは困難**である、というのが私の結論である。」（村山七郎「大野晋氏の比較研究はこれでよいのか」1981）

「南インドのタミルの文化がわが国の弥生文化に直接結びつけて考えるのかどうか。少なくとも農耕を専門にする立場からみますと、**はなはだ疑問**でございます。」（佐々木高明、1989）

「佐々木さんと同じように、私も**日本の稲作の起源は結局は中国のほうから来たのではないか**。ことに揚子江の流域あるいは江南との関係を重視している一人です。」（大林太良、1989）

## 村山七郎『日本語タミル語起源説批判』（1982）

村山七郎（1908－1995）

茨城県生まれ、早稲田大学中退、**ベルリン大学で言語学を学ぶ**（1942－45）

九州大学教授→京都産業大学教授

『日本語の起源』（1973）

「**南方語と日本語**」（1973）（江上波夫・大野晋編『古代日本語の謎』）

『日本語系統の探究』（1978）、『日本語の起源をめぐる論争』（1981）

「学界に受け入れられない低い水準」

＝大野晋が示した日本語とタミル語の対応語は**比較言語学の方法に沿っていない**

**日本語学会、国語学会の機関誌で発表していない** ← 週刊誌や著書での発表

→ ジャーナリズムがセンセーショナルに取り上げた

[批判内容]

・ **日本語とタミル語では数詞の対応がない**

←大野は、数詞は文化語で、欧印語では一致するが一致しない場合もあると反論

・ 大野の著書の中から **言語学上の誤り** を指摘（語源研究、音韻対応）

「シロウトの語源遊び」…「飛ぶ」「ニワトリ」「セイウチ」「スメラ」等

- ・ **学会誌（日本言語学会）での批判に対して沈黙**している
- ・ 大野晋は**ドラヴィダ学、タミル語の専門家ではない** → 日本のドラヴィダ学専門家（辛島昇）、タミル語研究者（徳永宗雄）の批評を仰ぐべき
- ・ 「ハタケ」（日本語）と「patukar」の例  
「（大野晋が示した）約420のタミル語・日本語比較例のうち史的日本語研究およびドラヴィダ言語学の立場からの検討に耐えうる説得力のあるものを**一つでも見出すことは困難**である、というのが私の結論である。」

[付] R.A.ミラー「日本語のタミル語ルーツ説をめぐる論争について」

「『日本語とタミル語』を読んで、この本が**日本語の起源について価値あるものは何ひとつ提供していない**という事実に驚いている。」

「大野晋氏は、欧米から何ものかを研究し学ぼうとする日本の学者たちを酷評し中傷している。」

**R.A.ミラー**（1924–2014）

1924 米国ミネソタ州生まれ、コロンビア大学で中国語、日本語を学ぶ

1955–63 国際基督教大学教授（言語学）

1964–70 イェール大学教授

1967 『日本語』（邦訳は1972）

1970–89 ワシントン州立大学教授

1971 『日本語と他のアルタイ諸語』（邦訳は1981）



## R.A.ミラー『日本語の起源』（1980、邦訳は1982 [村山七郎他訳]）

「今なお日本で「言語学」を「国語学」から孤立させている不幸なギャップ」

「言語と人間の遺伝的集団との間には、本質的な因果関係はない」

→ 「日本語の起源」と「日本民族の起源」は別の問題

「形質人類学や遺伝学の資料を言語学の資料と混同するという初歩的な方法論上の誤り」

「ひとつの大国のひとつの言語、すなわち **日本語だけが今日いまだにその起源が明らかにされていない**のである。」

「日本の学界は歴史言語学の方法を十分精通していない。」

… ①言語は変化する、②変化は規則的である

「日本語はアルタイ祖語の非常に後期のきわめて変化した形態」

「日本語は言語選択の特有さという点でツングース語と歩みをともにしている。」

「大陸から流入してきた集団の幾重もの波を考慮に入れなければ、日本語の起源について納得できる説明をすることはできない。」

「中国語、マライ・ポリネシア語族の影響」

「**日本語は混合語または雑種言語**と呼ばれるにふさわしい。」

## 安本美典の日本語起源論

『日本語の成立』（1973）、『日本語の起源を探る』（1985）、『日本語はどのように作られたか』（1986）、『研究史 日本語の起源－「日本語＝タミル語起源説」批判』（2009）

### 統計学による言語比較研究（基礎語の語頭の一致・不一致）

日本語＋60の他の言語を比較……基礎100語、基礎200語

数詞、身体語、基本動詞（言う、見る、歩く、食べる等）

基本名詞（山、川、水、島、雲、私、母等）、これ、あれ、寒い、暑い

#### ・日本語は様々な言語が流れ込んで成立した

- ・起源の祖語から分かれたという「系統論」ではなく「流入論」「成立論」
- ・日本語の最も古い層は環中国語（中国語の周辺の言語）、古極東アジア語
- ・その上に**様々な言語が重なった**

1. 6000～7000千年前……古極アジア語の分裂（朝鮮語、アイヌ語）
2. 5000年前……南方（インドネシア、カンボジア方面）より第二の波  
→ 日本語とインドネシア語は近い関係
3. BC 2～3世紀……弥生時代の初期、稲作とともに中国江南地方からビルマ系言語が流入、ビルマ系言語と日本語では身体語が共通
4. 紀元前後～AD200年……漢民族の中国語の流入、中国からの借用語が使われる

## [若い研究者も大野説を批判]

山下博司（1954生、マドラス大学留学、東北大学、インド思想史）、長田俊樹（1954生、北大出身、ムンダ語研究）、家本太郎（1960生、大阪外語大→京都大学、ドラヴィダ言語学）

1996年に国際文化センターが日本語系統論に関するシンポジウムを開催。  
→ 大野説への批判が多く出た。

「これに対して**インド研究者**の側は、この種の問題に対処するに当たっての自らの方法論的限界をわきまえつつ、問題をインドの文脈に局限し、日本語や日本文化の起源をめぐる論争の展開に踏み入ることを**注意深く回避してきた**傾きがある。…少なくとも、日本の南インドないしタミル研究者の中には、自らの専門分野を日本語・日本文化の起源を解く鍵と位置づけている者は、**まず一人もあるまい**。」（山下博司、1996）

### 長田俊樹の大野晋批判(2003)

「**大野晋がおかした重大な犯罪的行為**として、ズベレビルやエメノーの英語をわざと(?) 誤訳して、自分の都合のいいように解釈していることも指摘したが、これらについての返答はいっさいない。…**ここまでやると、老獪などといっていられない**。」

「大野晋は「日本語＝タミル語起源説」にとって都合のいいデータはなんでもとりあげるが、**都合のわるいデータについては終始一貫して完全に無視**している。」

「日本語系統論は**言語学から逸脱し、信仰の世界へと飛躍**してしまった。そのために言語学徒たちは**日本語系統論を忌避**するのかもしれない。」

## [大野晋の確信]

「日本の言語学会でタミル語と日本語の対応関係に対する自分の考えを認める人はいないけれども、**自分としてはますます自信を深めている。**」(大野晋、1989)

「(タミル語を知った1980年当時)すでに60才を超えていて余命いくばくもない。この研究は古代日本語が分かっている人間でなければできない。…… それまでの仕事で得た**古代語2万語の知識は、実は今の研究、日本語とタミル語との比較研究のための準備だったのだ。**」(大野晋、1996)

「サンガム文法というのがあるんです。その助詞と助動詞と日本語の助詞と助動詞が驚くべく一致する。それはもう驚くべきものですよ。それで**僕はどんなにぶっ叩かれてもびくともしない。**」(大野晋、1997)

「私はこの本の序文を書くときまで生きていくことができ仕合せである。**私の一生はこの一冊を書くためにあったと思う。**」(大野晋『日本語の形成』2000、序)

1990 『シンポジウム：弥生文化と日本語』

2000 日本言語学会シンポジウム「日本語の系統：回顧と展望」<大野も報告するが当日欠席>

2003 A. ボビン・長田俊樹編『日本語系統論の現在』

2007 松本克己『世界言語のなかの日本語：日本語系統論の新たな地平』

2015 京都大学人文研究所編『日本語の起源と古代日本語』

2020 長田俊樹編『日本語「起源」論の歴史と展望』

[ユトレヒト大学・ズヴェレビル教授（世界屈指のドラヴィダ語学者）の見解（1989）]

「ドラヴィダ語と日本語の系統関係の可能性という驚くべき結論は、徐々に有力になりつつあるように私には思われます。音韻的・意味的類似を示すこの三〇対のうちのほとんどどれも**偶然の類似として捨て去ることは難しい**。」「ほとんど信じられない、しかしまた、ますますまことらしさを帯びてくる系統的關係の可能性が 있습니다。これは**日本語とドラヴィダ語に共通の「先祖」あるいは「親」言語**を仮定することです。」

### 長田俊樹「日本語系統論はなぜはやらなくなったか」(2003)

「言語学を学ぶことは日本語系統論を探求することである。そう断言してもけっしてまちがいではない。そんな戦後の一時期があった。」「戦後五十数年がたつと、**日本語系統論を忌避する言語学者がじつに多い**。」

「「日本語系統論」という問題の設定じたいがまがり角にきているのではないか。」

「「日本語系統論」というわくぐみをとりはらって、混淆言語説も視野に入れて、日本語のなりたちをかんがえる時代になったのではなかろうか。」

「類型論的立場から、日本語の歴史にせまろうとする意欲的な言語学者がいる。それが**松本克己**である。」

「日本語系統論が**比較歴史言語学の動向を完全に無視して、暴走している**ことが日本語系統論離れをまねいている。」

「未来について、あまりかたることばがみつからない。それほど、日本語系統論の現状はひどい。」

## 長田俊樹「日本言語学史序説」(2020)

「日本語系統論は今や過去のものとなりつつある。…1997年に出た『岩波講座 日本語の科学』においても、1999年の『現代言語学入門』においても、日本語系統論はまったく登場しない。…大野晋のタミル語起源説によって、日本語系統論は終焉を迎えてしまった。」

「明治以後の日本語起源論を振り返ってみると、言語学外要因が大きなファクターとなった起源論と比較言語学の厳密なる方法論を堅持しようとした言語学者の戦いの歴史のようにみえてならない」「言語学者は論争としては負けたとさえ思われてきた」

## 松本克己の見解 (1929生、東大言語学科卒、静岡県立大学名誉教授、元言語学会会長)

- ・日本語は環日本海語群（日本語、朝鮮語、アイヌ語）の一つであり、広くはユーラシア太平洋語群（オーストロ群）に含まれる。
- ・Y染色体遺伝子による人間の系統関係の研究成果を言語研究にも生かすべき
- ・日本語は「出アフリカ古層系言語」（4万年以上前）に「太平洋海岸系言語（マライ系）」（2万年前）がかぶさったものであり、そのルーツは2万年以上まで遡る
- ・日本語の系統をインド・ドラヴィダあるいはタミル語に結びつけるという学説は、言語学はもちろん遺伝子系統地理論の側からは、全く荒唐無稽の論として却られるでしょう。」（「私の日本語系統論」2015）

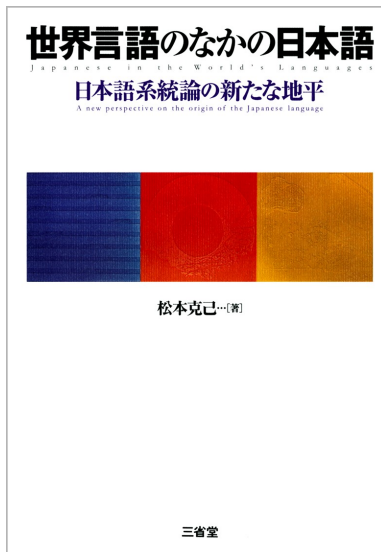
## 木田章義の見解 (1950年生まれ、京都大学教授、国語学)

「タミル語と日本語の文法はよく似ていることは間違いなく、他のアルタイ語との対応例に比べてみても、**形態の類似**もある。… 現在のところ200例近くは否定できないこと、文法的な類似があることを考えると「**タミル語説**」は**簡単には捨てることはできない。**」

「遺伝子の研究からは2500年前に7000キロの**海上の道**を**通ってタミル人が大量に日本に到来した可能性はほとんどない**ことが明らかにされている。」

「タミル語と日本語だけでなく、**タミル語とアルタイ諸語との関係**も明らかにしていく必要がある。」

「いっそう望まれるのは、新しい方法論や新しい視点での関係の捉えなおしや新たな類型言語の系統である。」（「日本語起源論の整理」2015）



## 芝蒸『日本語の起源』（2008）

芝蒸（1918－） 京都大学哲学科卒。カント、ヘーゲルを研究。京都女子大学教授  
ドイツ・ハイデルベルク大学で哲学・人類学を学ぶ（1969年）  
「ドラヴィダ語はアルタイ言語である」という論文を読んで驚く  
→1973年に「ドラヴィダ語と日本語」を発表、大野晋説の先駆者

### 1. 原日本人の成立（3－4万年前～BC5000）

古モンゴロイドが東北アジア、南中国から日本列島に渡ってきた  
→ 両者は中部地方で出会う

「原日本人の言語」の痕跡がアイヌ語……アイヌ語の故郷は南島

### 2. 縄文時代後期の原始言語（BC5000～）

南島系（オーストロネシア系）、ドラヴィダ系（南アジアのアルタイ系）、  
南アジア系（オーストロアジア系）の人々が江南から北上して日本へ到来

### 3. 弥生時代の古代日本語（BC500～）

朝鮮半島、日本海からアルタイ語系の人々が日本に渡来

① 第一段階（弥生時代初期）……稲作、金属器の導入、南島語＋モンゴル系が融合

② 第二段階（古墳時代、征服王朝）……神武東征、崇神王朝、ツングース系

### [結論]

日本語は南島諸語の基層の上にアルタイ諸語の上層が重なった二重構造を持つ

日本語の音韻は南島諸語、文法構造はアルタイ諸語から来ている

ドラヴィダ語はアルタイ諸語の一つ



ドラヴィダ語族 (=アルタイ系言語) は、BC3000年頃、西北インドに侵入し南下。  
先住のムンダ人 (モン・クメールと同系) を支配し、インダス文明を築いた。

BC1700年頃、西方からアーリア人が侵入し、ドラヴィダ人は中部、南部へ移動

→ 一部はマレー半島、インドネシアに移動

弥生初期以降、モンゴル系、ツングース系の部族の侵攻によって、先住の南島諸語系の人々を支配し、古代国家が形成された

### [神々の系統]

- ・モノ…… メラネシア語のmanaに由来
- ・タマ……インドネシア語 (ama)、メラネシア語 (tama)、高砂族 (timas)
- ・テラス……タガログ語 (telang)、ジャワ語
- ・イム…… インドネシア語に由来
- ・ツチ…… アルタイ諸語 (icci)
- ・ムチ…… モンゴル語 (moci)
- ・フツ…… モンゴル語 (furuts)
- ・カミ…… モンゴル語に由来
- ・ツミ…… ツングース語 (tem)
- ・ニニギ…… ツングース語
- ・スメラ…… ツングース語
- ・ミコト…… ツングース語

- ・「アマテラス」は南島諸語
- ・「タカムスビ」はツングース語（「生む」という意味）
- ・皇祖神は南島土着系とアルタイ系の融合
- ・祝詞（「大祓」）の言語学的研究

### [藤原氏の出自]

- ・藤原氏（中臣氏）は弥生系氏族（土着南島語系＋モンゴル語系）
- ・応神、仁徳以来の征服王朝はツングース系
- ・藤原氏の出自が不詳なのは不自然で異常なこと
- ・当事者に明らかにしたくなかった然るべき事由があった
- ・春日大社（藤原氏の氏神）の祭神は、武甕槌命（タケミカヅチ）、経津主神（フツヌシ）、天児屋根命（アメノコヤネノミコト）、姫大神（ヒメノオカミ）
- ・中臣氏は本来は武人であり、「祭祀者」ではなかった



## 小泉保 『縄文語の発見』 (1997)

小泉保 (1926–2009)

東大言語学科卒。大阪外語大、関西外語大教授、日本言語学会会長 (1988–91)

「系統論はいきなり日本語の祖先を特定しようとして、日本の北方に南方に親類縁者を探し求めてきたが、結局、それらしい相手を見つけることができなかった。」

「日本語の経歴を探求するに当たって、まず曾祖父の言語すなわち**縄文時代の言語の解明が大前提**となすと考えている。」

「日本語の源が弥生時代の言語であるというのは妄想。」

「**縄文時代の言語は弥生時代の言語により完全に駆逐され消滅したわけではない**」

「考古学や人類学は縄文時代と弥生時代は連続していると主張している。」

「方言（九州、関西、関東、東北）を分析することによって縄文語を復元させることができる。」 ……カオ（ツラ）、トンボ（アキツ）の例

「日本語は日本列島が孤立して以来1万年間にこの島国で形成された。」

- ・ アフリカに誕生した原人 → 100万年前にアジアに進出
- ・ ホモサピエンス（新人）が10万年前にアフリカを出発 → アジアに到達
- ・ スンダランド（1万2千年前まで南シナ海にあった陸塊）の人々が太平洋の島々に移住  
→ **一部が日本列島にも到達**
- ・ アイヌ人、沖縄人の祖先は縄文人……ミクロネシア人、ポリネシア人と近い関係
- ・ 港川人（沖縄で発見された1万8千年前の人骨）は東南アジアを故郷とする集団
- ・ 弥生人は身長が高く面長で鼻が狭い
- ……朝鮮半島からの渡来系、その起源は中国東南部またはシベリア地方
- 日本人の祖先は南方モンゴロイド（早期）＋北方モンゴロイド（渡来系）
- 「**東北方言が縄文語の連続**である。」 「出雲方言は東北弁の系列。」
- 「渡来人が先住民（縄文人）を駆逐したわけではない。」
- 「**弥生時代の渡来人は縄文語を習得**した。」
- 「琉球方言が本土から分離したのは縄文時代のかなり早い時期。」
- 「弥生語の影響を強く受け形成されたのが関西方言。」

## [参考資料]

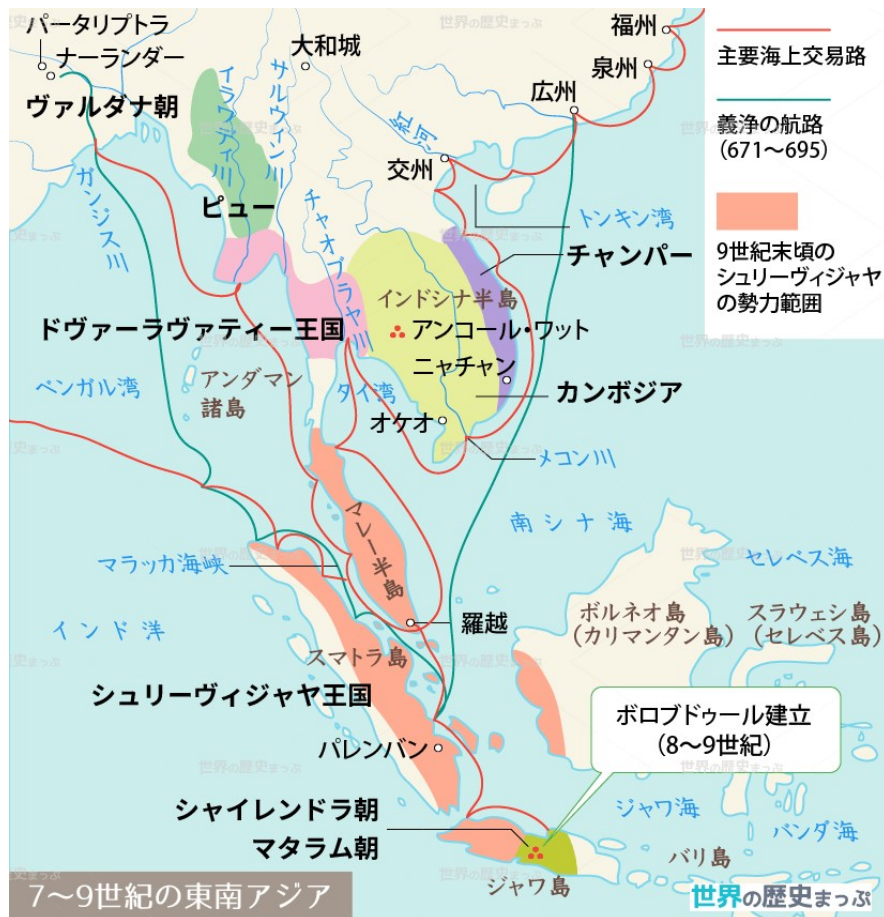
### [タミル語が渡来した経路と時期]

- ・海路による渡来……ベンガル湾を横切りマレー半島へ →  
ベトナム、台湾を経由して日本へ(北九州と同時に朝鮮半島に伝来)
- ・弥生時代の開始時期(紀元前10世紀)、鉄も南インドから同時期に伝わる

「ドラヴィダ人(タミル人)は、インドシナ半島から遠く南インドへ逃避した倭族として理解したいと思う。」(鳥越憲三郎『原弥生人の渡来』1982)



「インドシナ半島南部から島嶼部にかけて早くから黒人が住みつき、いくつもの王国を築くまでに成長していた。その多くは**インドから移動してきたもの**とみてよかろう。それら黒人が築いた王国として最も有名なのは、現在、その子孫がベトナム南部からカンボジア南部にかけて住むチャム族のものである。彼らは二世紀末に仏教文化の影響を強く受けた**チャンパ王国**を建設した。」(鳥越憲三郎)

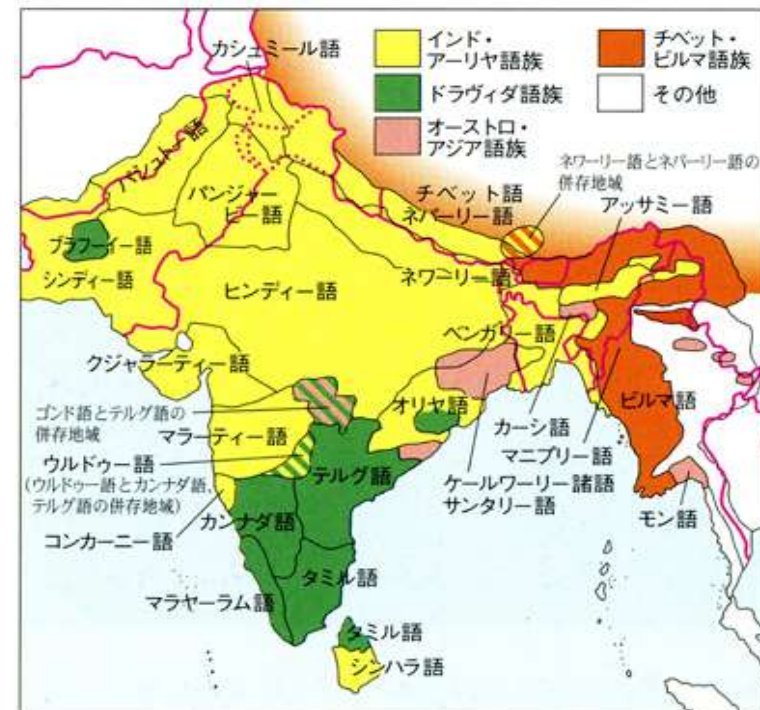
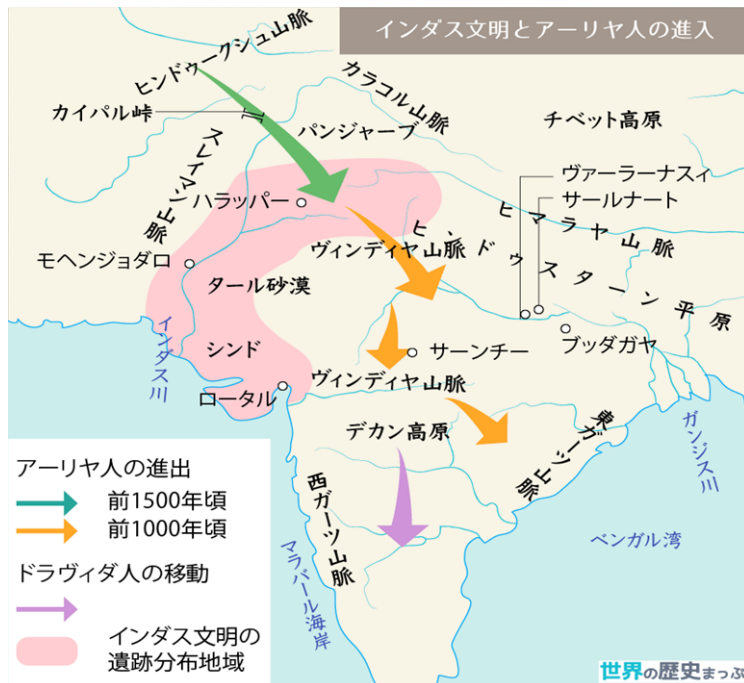


## [インダス文明との関係]

- ・ 文字以前の記号 (Graffiti) ……インダス文明、南インド、弥生土器に共通
- ・ **インダス文明の言語はドラヴィダ系 (膠着語)**

「Graffitiがインダス文明にまで遡ることは確実である。この事実は南インドの巨石時代の文明がインダス文明のある部分を受け継いでいることを示す。ということは、弥生文明が南インドの巨石時代を介してインダス文明の流れを汲むところがあることを示唆する。」  
 (『弥生文明と南インド』)

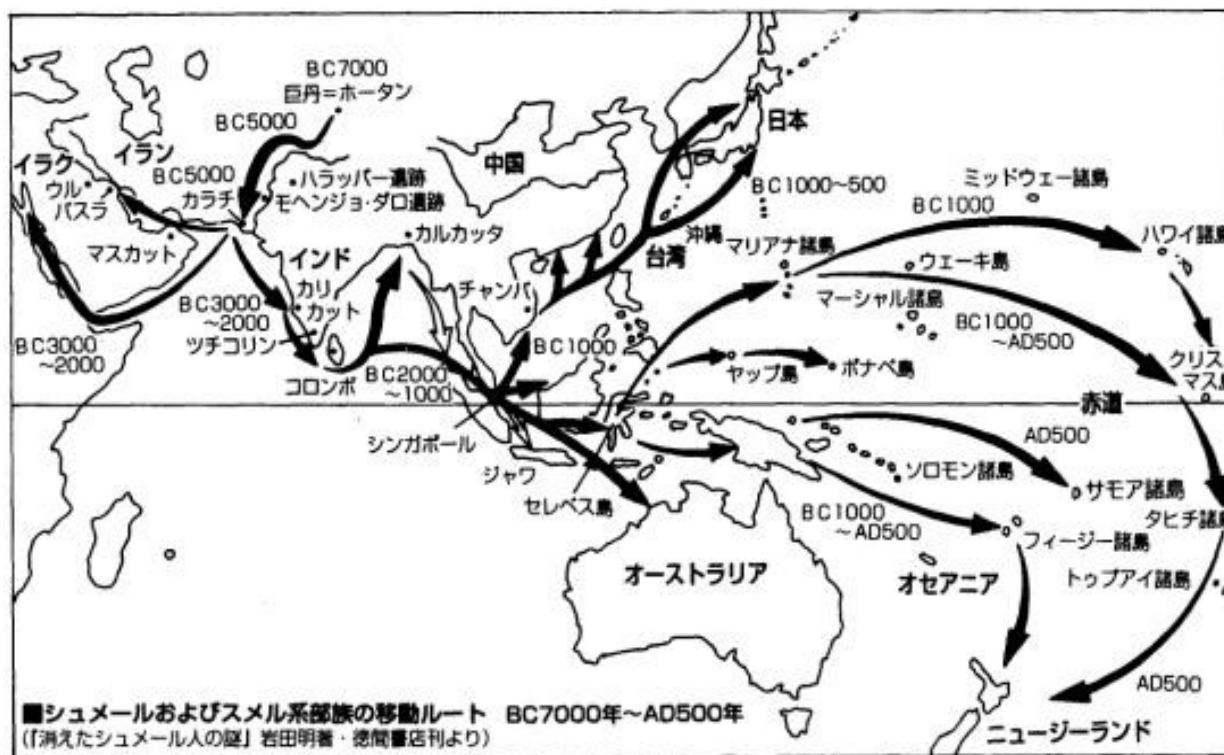
→さらに、**インダス文明とメソポタミア文明の関係、シュメール語と日本語の関係**が指摘されている。(R.Yoshikawa『Sumerian and Japanese』1991)



・シュメール滅亡(紀元前2000年)、インダス文明滅亡(紀元前1500年)・・・アーリア人到来

「**シュメール語の語順はタミル語や日本語と同じで単語にも対応語がある**という意見もあります。スリランカのサダミラフ教授は『ドラヴィダ語としてのシュメール語』という著書(1965年)のなかで、紀元前2400年頃までの**シュメール語はタミル語と同系**であると主張しています。」(大野晋、1996)

「ドラヴィダ語としての文明は、インダス文明の主体であったドラヴィダ人が南インドにおいて発展させたものと見る意見が有力である。**インダス文明は遥か西のシュメールの文明と言語を受け継ぐ**との見方がある。そしてそれが明らかに立証された暁には、**日本は弥生時代に南インドを媒介にして、世界最古のチグリス・ユーフラテス文明と一つの線で連なる**ことになる。」(『日本語の形成』,2000)





# [人類の歴史と農耕・稲作の始まり]

- ・人類は400～200万年前にアフリカで誕生したとされる・・・アウストラロピテクス(猿人)
- ・現在の人類の祖先であるホモサピエンスは約20万年前に東アフリカで生まれた  
→ アフリカから世界各地に広がっていった



- ・日本に人類が住み始めたのは約4万年前と考えられている(旧石器時代)
- ・人類が農耕を開始したのは約1万年前……チグリス・ユーフラテス川流域  
← 東南アジア起源説、複数同時発生説など諸説。農耕開始時期も未確定。
- ・石器、農具、火の使用、焼畑

## 中尾佐助『栽培作物と農耕の起源』(1966)

- ① 根菜農耕文化……熱帯アジア(バナナ、イモ、サトウキビ)、焼畑
- ② 照葉樹林文化……東南アジア北部、中国南部、西日本(クズ、ワラビ、ミカン、茶)
- ③ サバンナ農耕文化……西アフリカ、インド(雑穀、マメ、ゴマ)→ 周辺で稲作を開始
- ④ 地中海農耕文化……中東(小麦、大麦、ナタネ、ダイコン)、家畜の利用
- ⑤ 新大陸農耕文化……中南米(ジャガイモ、トウモロコシ、キャッサバ)

## [稲作の起源]

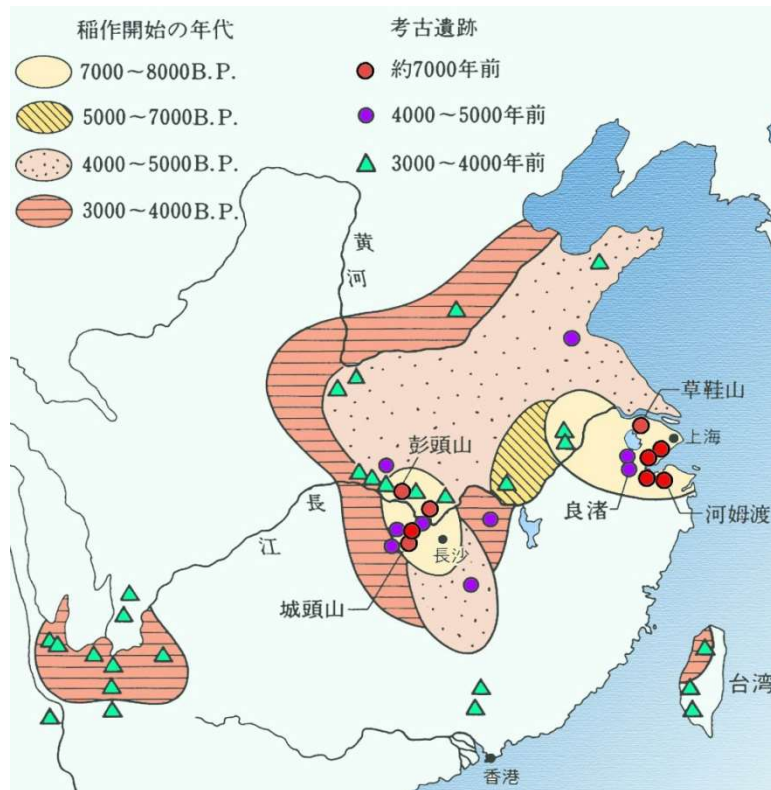
- ・インド説……多様な品種
- ・アッサム雲南説(渡部忠世、中川原捷洋)……野生種、遺伝的多様性
- ・長江下流域での稲作遺跡発見(河姆渡遺跡)

## [縄文農耕論と稲作の渡来]

- ・縄文時代(1万5千年前～紀元前4世紀)
  - ……磨製石器、縄文土器、定住集落
- ・弥生時代(紀元前3世紀～3世紀)
  - ……弥生式土器、稲作、環濠集落、青銅器・鉄器
- ・「旧石器」の発見……岩宿遺跡(相沢忠洋)
- ・縄文時代は「狩猟・採集・漁労」を行っていた
- ・縄文時代に農耕を行っていたか否かについて論争が行われてきた。
- ・**縄文農耕論** (藤森栄一)の主張
  - ①狩猟生活の割には鍬(やじり)の数が少ない
  - ②石斧を農耕用に使っていた痕跡がある
  - ③石臼・石皿で木の実、雑穀を粉にしていた
  - ④焼畑を行っていた痕跡がある
  - ⑤集落の規模が大きく狩猟・採集のみでは食料確保が困難
- ・佐々木高明『稲作以前』(1971)……焼畑による農耕(雑穀、陸稲)、イモ

## ・稲作の渡来ルート ← 日本には稲の野生種がない

- ① 北方説……華中・山東半島・朝鮮半島を經由して渡来
- ② 南方説……華南地域から台湾、沖縄を經由して渡来
- ③ 直接渡來說……長江下流域から東海(東シナ海)を渡って直接渡来



## 安藤広太郎『日本古代稲作史雑考』(1951)

- ①稲の原産地……インド、南シナ、インドシナにおいて独立して稲作を開始
- ②日本への稲作の渡来……江南地方で稲作を営み米を常食としていた南方民族が北九州と南鮮に移入し稲作(ジャポニカ)を伝えた
- ③稲作渡来の時期……弥生式土器時代のBC1世紀頃に平坦低湿地で開始
- ④朝鮮との関係……朝鮮と日本はほぼ同時期に稲作を開始

### [稲作を日本に伝えた民族]

BC334年に越が楚の攻撃によって滅亡。越人が大量に日本に渡来して弥生時代の稲作が始まる。その前から呉・越から山東半島への進出があった。

(池橋宏『稲作渡来民』(2008)、鳥越憲三郎『原弥生人の渡来』(1982))

### [稲作と弥生時代の開始時期]

- ・炭素14年代法による年代測定(国立歴史民俗博物館)
  - ……紀元前4世紀と考えられた遺跡は500年遡ると発表(2003年)
  - =日本の稲作はBC10世紀に開始 →「弥生時代はBC10世紀に始まる」と主張
- ・稲作の渡来ルート 長江中下流域(BC1万年)→山東半島(BC25～20世紀)
  - 朝鮮半島(BC15世紀)→ 北九州(BC10～9世紀)
- ・日本各地で稲作が行われるまでには長い時間がかかった
  - 近畿(BC7～6世紀)、東北北部(BC4世紀)、関東(BC2世紀)

## [日本語の起源と稲・米の語源]

・「日本語の起源」は「日本人の起源」、「稲作の起源」と関わる問題……未解決

### [日本人の起源]

- ① 北方から……シベリア、騎馬民族
  - ② 朝鮮半島から……渡来人
  - ③ 中国大陸から……呉・越、徐福
  - ④ 南島から……黒潮
- ・アイヌ、琉球、縄文人、弥生人、蝦夷と大和政権



## [稲作と言語]

稲作を日本に伝えた民族がいたとしたら、言語も同時に伝えたと考えられ、稲作・米に関する共通の単語があるはず

## [安藤広太郎の見解]

サンスクリット語で稲は「Vrihi」(ウリヒー) → 日本語の「ウルチ」

アフガニスタン語 Urishi、シンハラ語 Urhi

中国語……タウ(稲)、ホー(禾)、ミー(米)、カン(穂)

朝鮮語……ト(稲)、ハ(禾)、ミ(米)、ペ(稲)                      日本語とは異なる

マレー語……bras(米) → ウルチ

中国江南地方(呉音)……Niwan(稲)……ni の系統

日本語の稲……イネ、イナ、ニ、ヌカ……ニニギノミコト、クシナダヒメ

日本語の「稲」は南方の言語と共通

米(コメ)……沖縄の久米島、「古見」(柳田国男の指摘)

oryza(ラテン語、ギリシャ語)、riso(イタリア語)、riz(フランス語)、rice(英語)

← brizi(古代ペルシャ語)、vrihih(古代インド語)、bras(マレー語)